

## 短歌に込めていた当時の思い

「心には もうこれ以上刺さらないほどのナイフが刺さった」と言う

ボク まるで 火炎放射器で焼かれてる 機関銃から 撃ち抜かれてる

夜・夜中、朝・明け方も 泣いて起き 「いやだ！いやだ！」と叫んで歩く

日中は 死んだ目をして「死にたい」と 無気力になる 愛しの我が子

「もういやだ この世に生きていたくない」(と言う) 我が子を抱え 死をも見つめた

「お子さんは 一種の病気ですから」と 我が子を前に平然と言う (教師が)

「ボクは病気なのか？」 そう子に思わせる罪は大きい

「悲しみと怒りに…」大きな声で もののけ姫の歌 繰り返す

子の生きる希望も権利も奪い取り 心に烙印 押したる人々

「お母さん! 伸ばした腕が泣き叫ぶ声にならない 目が泣き叫ぶ」

行かなくて いいよと言ったその時に 涙流して「ありがとう」の子

どれほどに つらく苦しい日々だった 安堵の顔が全てを語る

飛び込んだ 我が子助ける 母の手が 岸を掴むたび 踏み躪られて

大勢で待ち構えては 見下して 生きていくならこの岸上がれと

遠くても我が子と共に生きる為 沖の島へと泳ぎ始める

我が母校 「人間教育」受けてない教師の多さに 深く悲しむ

子にとって 最大の教育環境は「教師自身」と知らぬ教師等

「もし龍馬 生きていたなら この社会見て何と言う？」 子に問われたり

「どうせまた だまされるのに 決まってる」 子どもに不信教える学校

屈辱を いつか晴らさんこの子らと 伸びて輝け 世界の庭で